




2024年3月29日 第59号


JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会



第67回日本手外科学会 学術集会の開催に あたって



目次

- 第67回日本手外科学会学術集会の開催にあたって
- JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記
- JSSH-HKSSH Traveling Fellow報告記
- JSSH-KSSH Traveling Fellow報告記
- JSSH-TSSH Traveling Fellow報告記
- 手外科パトナリレー(第12回)
- 第16回 手外科医のリスクマネジメント
- Joyの声(第9回)
- リレーエッセイ:技術紹介
- 委員会報告
- 日本手外科学会関連のお知らせ
- 関連学会・研修会のお知らせ
- 編集後記

面 川 庄 平

奈良県立医科大学 手の外科学講座

この度、2024年4月25日(木)～26日(金)の2日間、奈良県コンベンションセンター/JWマリオットホテル奈良において第67回日本手外科学会学術集会を開催させていただきます。奈良県立医科大学といたしましては、第24回の増原建二会長、第41回の玉井進会長に続いて今回が3回目の開催となり、大変光栄に存じております。

本学術集会のテーマは、『新手一生 手の機能と解剖』と致しました。日本手外科学会は1957年に創設され、全国に1000名あまりの手外科診療に従事する手外科専門医は、新しい技能(新手)を習得するために一生をかけて追及しております。そこで本学術集会では、“手の機能と解剖”に再度焦点を当て、これまで手の外科の先達の先生方が如何にして新しい治療法を考案されてきたか、現在どのような新しい技術が進行中で今後どういう方向に進んでいくのか、新規の医療技術や医療情報について深く議論したいと考えています。

本会のポスターは、多くの苦難の末、来日をはたされた鑑真大和上が759年に開かれた唐招提寺の千手観音菩薩像の手を背景に使用させていただきました。新しい手技(新手)が次々に湧き上がり救済(治療)に導く様子を表現しました。

一般演題に加えて、8つのシンポジウムと6つのパネルディスカッション、10の教育研修講演(うち5つは機能と解剖講演)を企画しました。岩崎倫政先生に理事長講演、金谷文則先生と玉井進先生に特別講演1、遠藤秀紀先生(東京大学総合研究博物館教授)に特別講演2をお願いしております。さらに、5つの特別企画として、新手一生優秀演題セッション、トラベリングフェローセッション(米国、香港、台湾、韓国)、5名のエキスパートの先生に新手一生の極意についてお話しいただく企画などを予定しております。英語セッションとして、海外から7つの招待講演、2つの国際シンポジウムのほか、日伊手外科合同会議の開設20周年を記念してイタリアンハンドクラブセッションを準備しております。また、海外からのFreePaperSessionでは、多くの演題申し込みをいただいております。その他の企画として、4つのハンズオンセミナーに加え、スポンサードセミナー、キャリアアップ委員会セッション、先天異常懇話会、早朝のジャーナルクラブ(論文UpdateReview特別企画)、ビデオセッションなども準備しております。

今回の学術集会が会員の皆様、特に若い先生方に実りあるものとなるように願い、奈良医大同門会の支援のもと手の外科・マイクロサージャリーグループが結集して準備を進めております。春爛漫の美しい奈良に皆様をお迎えできますよう鋭意取り組んでまいりますので、多数の皆様の参加を心からお待ち申し上げます。

JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

兒 玉 祥

広島大学大学院医系科学研究科整形外科学

この度、山形大学整形外科の丸山正博先生とともにASSH international traveling fellows programに参加しました。世界各国から選ばれた29人のフェローが27か国から参加し、3～4人のグループに分かれて行動しました。私たちのグループには、オーストリアのDr. TurkhanとペルーのDr. Ramasが加わりました。プログラムは10月5日から7日にかけて開催されたASSH annual meetingを含む3週間にわたり、指定された4つの施設を訪問しました。ただし我々はお発を一週間前倒して個人的に選んだ2施設を追加で訪問しました。

1週目：テキサス州TMI sports medicineのDr. Meisterを訪問しました。年間200例のプロ選手のUCL再建術を行う高名なスポーツドクターで、広島大学がチームドクターを務める広島東洋カープの石井トレーナーの紹介で訪問させて頂きました。完成された手術手技、リハビリの設備、技術などすべてが秀逸でした。次にStanford大学のDr. Yaoを訪問しました。丸山先生は4年間同大学へ留学されていたのでStanfordでの生活についても詳しく教えて頂くことができました。

2週目：正式なプログラムが始まり、Dr. Turkhan、Dr. Ramasと合流しました。1施設目Colorado大学ではDr. Leversedgeの神経の手術やDr. CatalanoのPIP関節内骨折などの手術を見学しました。日常的によく遭遇する疾患でしたが、手術方法や手技に文化の違いを感じ大変参考になりました。2施設目はNew Mexico大学でDr. Mercerにホストして頂きました。4輪バイクやGun shot injuryなど日本で見慣れない外傷に触れる貴重な経験となりました。Dr. Mercerは6児の母でありながらたくさんの外傷手術をこなすパワフルな方で、若いフェローたちにとっても母親の様な存在に見えました。研修の最後にDr. Mercerの卒業年度が私と同じということを知り、自分の貫禄の無さが少し恥ずかしくなりました。

3週目：ASSH annual meetingでは我々にはポスター発表と歴代のBunnel FellowとのBunnel Luncheonのイベントがありました。またそのほかの講演も有益でした。

4週目：3施設目としてMichigan大学のDr. Chungを訪問しました。非常に優れた業績を持つ先生

です。訪問前は論文を書くことに多くの時間を費やしているのではないかと想像していました。しかし、実際には診療、手術に多くの時間を費やしていました。論文は2の次で一番大事なのは診療、手術だと仰っていたのが印象的でした。

最後にMayo Clinicを訪問しました。まず腕神経叢損傷に対するFree gracilis muscle transferを見学しました。Dr. BishopとDr. Shinが顕微鏡越しに向かい合いマイクロの手術をしている姿にミーハーな気持ちで見とれてしまいました。手術中は緊張感がありましたが、手術が終わるとDr. Bishopから「Dr. 砂川(1998～9年にBishopの下に留学)に見せるために一緒に写真を撮ろう」と言って頂きDr. Shinも一緒に写真を撮ることができました。砂川先生有難うございました。二日目はHostのDr. Moranに人工肘関節に興味があると話したところDr. Mark MorreyのAllograftを用いたRevision TEAの見学を手配してくれました。インプラント抜去、Allograftの形成、固定方法それぞれのテクニックを非常に細かく教えてくださいました。

この度のFellowshipに際し、ホストの皆様をサポートして頂き非常にスムーズに旅程を終えることができました。また、共に行動した丸山先生には大変助けられ、アメリカ生活経験のない私には大変心強かったです。また今回のFellowshipを通して一緒に旅をした他国の二人のフェローを始め、新たな友人を作る機会に恵まれました。最後になりますが、ご支援頂きました国際委員会の先生方、日本手外科学会の皆様に深謝いたします。



メイヨー兄弟とフェロー達(左から丸山、Ramas、Charles Mayo(弟)、William Mayo(兄)、兒玉、Turkhan)



国際委員長とフェロー達



学会でのBunell Luncheon (右下段 : Dr. Martin Boyer、右上段 Dr. Jeffrey Yao)

JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

丸 山 真 博

山形大学整形外科

この度、ASSH-JSSH International Traveling Fellow 2023として広島大学の兒玉祥先生とともに9月16日から10月16日の約1か月間、米国を訪問してきましたので報告いたします。

私たちはgroup Cに割り当てられ、ペルーからのMiguel Lamas先生とオーストリアからのTurkhan Mehdiyev先生の2名を合わせて合計4名と一緒にASSHが指定したUniversity of Colorado (9月25～26日)、University of New Mexico (9月27～29日)、University of Michigan (10月9～10日)、およびMayo clinic (10月12～13日)を訪問しました。また、ASSH annual meetingの他、1週間早く9月16日から渡米しTexas Metroplex Institute for Sports Medicine & Orthopedic Surgery (TMI Sport Medicine)とStanfordを訪問しました。

TMI Sport MedicineではDr Misterを訪問しリハビリ施設、外来、手術を見学しました。患者は野球選手が多く、リハビリ施設にはマウンドもありました。患者さんの多くはプロ野球選手で、大物選手も中にはいました。手術では話題のPL腱とinternal braceを用いたハイブリッドによるUCL再建術を見学しました。

StanfordではDr Jeffrey Yaoを訪れました。Stanford留学時代に一緒に研究をした縁で手術見学をお願いしました。手術は手関節ガングリオン、橈骨遠位端骨折、中手骨骨折、手根管症候群、ばね指、有鉤骨鉤骨折、EPL腱断裂、mucous cystと多岐にわたりましたが、不運にもCM関節症や手関節鏡手術は見学できませんでした。

University of Coloradoでペルーとオーストリアの2名と合流しました。Dr Leversedgeがホストです。ここではDr Iorio、Dr Greyson、Dr Catalanoの様々な手術を見学させていただきました。特に舟状骨近位偽関節骨壊死に対する血管柄付き大腿骨内顆骨移植術は印象的でした。

University of New Mexicoでは熱烈歓迎していただきました。ホストはDr Mercerで女性の先生です。New Mexicoで唯一のLevel 1 trauma centerのため外傷が多く、手術のほとんどが伝達麻酔で行っていました。

翌週はTorontoに移動してASSH Annual meetingに参加しました。各講演の他、International Traveling fellowが集まるBunnel Fellow lunchに参加し、様々な国のFellow達と交流しました。日本からは国際委員長の市原先生などの日本からの先生方にもお会いし、これまでのTraveling Fellowの現状についてお話をしました。

最終週、University of MichiganではDr Kevin Chungがホストです。3歳児のGun Shot injuryなどの手術や外来を見学しました。数多くの論文や書物を書いていることもあり、1例1例大切に丁寧な写真をとっていました。ここでもDr Chung Labで各フェローが講演をしました。

最後の訪問施設であるMayo Clinicでは、2024年度のASSH会長のDr Moranがホストです。手術は、Dr BishopとDr Shinの腕神経叢損傷に対する遊離薄筋腱を用いた肘屈曲再建やDr Mark Morreyの人工肘関節再置換術などを見学しました。また、朝6時半からフェロー達による講演をしました。

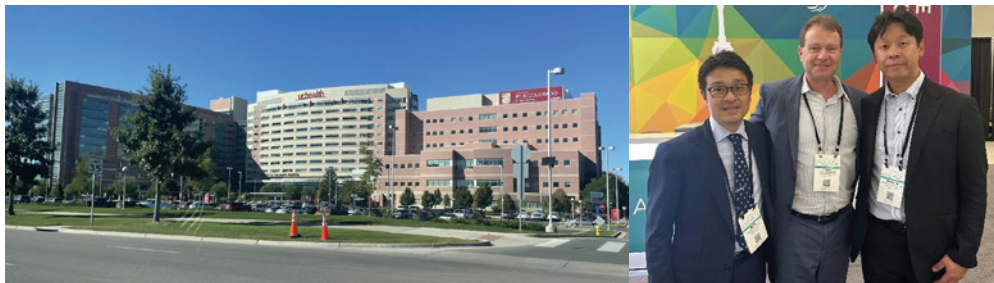
このASSH-JSSH International Traveling Fellowshipを通じて、ここでは割愛しましたが、友人や知人に再会できたことがとても嬉しかったです。当然ながら文化や人種などの患者背景や施設の違い、地域性など様々な要素で提供する医療には違いはありますが、基本的なところとして患者さんによくなってもらいたいという思いは変わらないなと思いました。また、海外の医師達はみな日本から多くの事を学んでいると言ってきており、日本の先人達の凄さを改めて感じました。この度は日本手外科学会の代表としての使命を果たせたかはわかりませんが、出会った人達とのまた再会できるよう自身も精進できればと思います。また、最後にこのような機会を与えていただきました手外科学会の国際委員長の市原先生や委員の先生方、手外科学会の会員の先生方に感謝申し上げます。そして何よりもいつも支えてくれている家族に感謝し、報告記を閉じたいと思います。



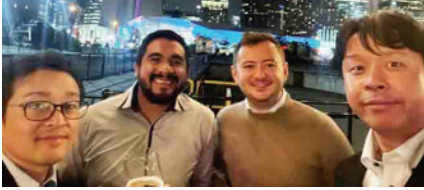
TMI Sport MedicineでDr Misterと一緒に



Stanford大学でDr Yaoと一緒に



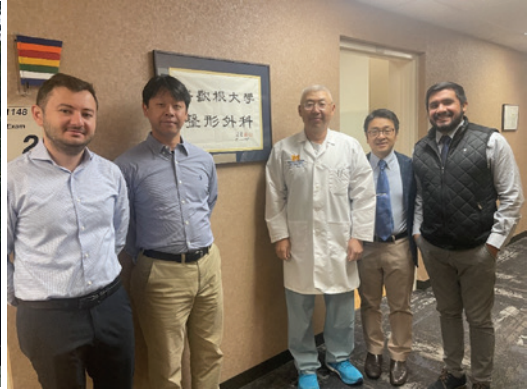
University of Colorado、Dr Leversedge



ASSH in TorontoでGroupCのfellows達



Bunnell & International Traveling fellow lunch



University of Michigan、Dr Kevin Chung先生と一緒に



Mayo Clinic、Dr BishopとDr Sinと一緒に



Dr Moranと一緒に

JSSH-HKSSH Traveling Fellow報告記

野口 貴志

京都大学医学部附属病院 整形外科 助教

2023年の日本手外科学会Asia-Exchange Traveling Fellow (TF) に選出され、香港手外科学会 (HKSSH) 学術集会へ参加し、香港の病院訪問をいたしましたことをご報告いたします。今回のTF受賞・派遣にあたり、推薦いただきました京都大学整形外科松田秀一教授、池口良輔先生、大学院時代にご指導いただいた近畿大学整形外科柿木良介教授に心より感謝申し上げます。また、日本手外科学会国際委員長の市原理司先生と国際委員の皆様にご貴重な機会を与えていただいたこと、本当にありがとうございました。

2020年からのCovid-19パンデミックにより香港でも、街全体が厳しいロックダウンになったそうです。学会も開催が制限されました。2023年によりやく現地開催と直接参加可能となり、コロナ禍明け初の現地参加となりました。

HKSSHは2023年3月25日、26日の両日開催されました。TF選出(2022年12月末)後間もない訪問でしたが、HKSSHの事務局に学会参加および病院訪問のスケジュール調整と丁寧に対応いただきました。香港のTFは毎年1名選出なので、本来は一人で訪問するのですが、今回はコロナ禍明けということで、2020年選出の名倉一成先生と2022年TFの吉田史郎先生も学会に招待されており、現地でご一緒することができました。お二人のおかげで緊張はほぐれ、リラックスして学会に臨むことができました(写真1)。



写真1 TF3人、左より野口・名倉Dr.・吉田Dr.

香港は小さな都市で、面積も人口も東京の半分位です。私は初めての香港訪問でしたが、地下鉄とバスなど公共交通機関が発達しており、空港から都市部、街中から学会会場への移動もスムーズでした(写真2)。

日本の学術集會に比べると小規模でしたが、會はHong Kong Football Clubという格式高い会場で開催されました。一つの会場ですべての演題が発表できたため、演題ごとに、全員参加でのdiscussionとなりました。HKSSHの学会運営は私と同年代(40代)のメンバーによって学会の運営がされており、非常に驚きましたが、エネルギーで勢いを感じました(写真3)。



写真2 香港の夜景

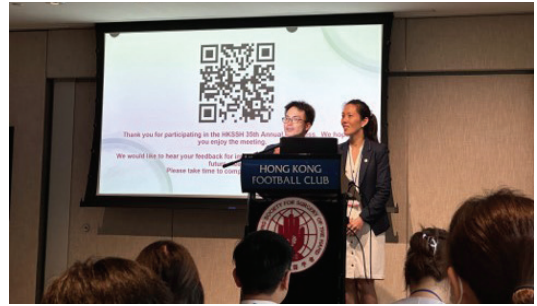


写真3 香港手外科学会の運営メンバー Dr. MAK and Dr. LEE

私はAmbassador Speakerとして、初日の午後に京都大学で行なっているBio-3D printerを用いた細胞を積層して形成した人工神経の発表を行いました。人工神経の構造、再生のメカニズムなど、多数のご質問をいただきました(写真4)。3Dプリンターを利用した矯正骨切に関する多くの演題があり、topicでした。Guest Societyのドイツからは、新しい指の創外固定や、人工CM関節、3Dプリンターを用いた骨軟部腫瘍切除後再建の発表がされ、興味深い発表でした。ドイツの演題で紹介された創外固定器は、学会後の病院訪問の際に早速そのインプラントが使われ、迅速な導入に驚きました。香港では良いと判断された術式やインプラントは、すぐに導入できるシステムがあるそうです。

初日の夜には会長のKoo先生主催の会長招宴があり、手関節鏡で有名なPC Ho先生をはじめとした、HKSSHのメンバー、ドイツ手外科学会のメンバーとゲームなどを通して親交を深めることができました(写真5)。



写真4 Ambassadorとして発表の様子 発表後にDr. KooよりCertificateを授与されました。

学会後の1週間で3つの病院(Queen Mary Hospital, Tuen Mum Hospital, Prince of Wales Hospital)を訪問しました。Queen Mary HospitalとPrince of Wales Hospitalは、香港大学、中国の香港大学の附属病院で、学生教育や研究も行なっていました。Queen Mary Hospitalでは、研究室も案内してくださり、マイクロサージャリーのトレーニングルームや3Dプリンターを利用した研究を見学しました。いずれの病院も、朝から夕方まで病院を訪問し、手術、カンファレンス、Hand Therapy Unitの見学を行いました。手術見学では、外傷、先天奇形、末梢神経障害、関節鏡手術など多数の手術を見学させていただきました(写真6)。各病院の訪問後は連日食事会に招待してくださり、満腹になるまで香港グルメを堪能させていただきました(写真7)。



写真5 Dr. Hoとの写真



写真6 左よりQueen Mary Hospital, Tuen Mum Hospital, Prince of Wales Hospital



写真7 この後、大きなイセエビをいただきました
左より Dr. Yep, 野口、吉田Dr

医師免許取得後、20年近くが経過し、今は専攻医教育にも携わっていますが、若手医師に今回の経験も含めて、国際学会への参加をお勧めしたいと思います。今後も、微力ながら日本の手外科の発展に貢献できるよう精進したいと思います。改めて、このような素晴らしい機会を与えてくださった日本手外科学会に感謝いたします。

JSSH-KSSH Traveling Fellow報告記

菅 沼 省 吾

石川県立中央病院 整形外科

この度、2023年度JSSH-KSSH Traveling Fellowに選出いただき、2023年10月31日から11月9日までの韓国滞在期間中に韓国手外科学会学術集会への参加と韓国国内の施設へ訪問する機会をいただきましたので御報告致します。

ASAN Medical Center (AMC)

まず、11月3～6日にAMCを訪問致しました。AMCは韓国最大規模の病院であり、病床数は2732床を誇ります。NewsweekのWorld's Best Hospitalsで毎年上位にランクされており、広大な敷地内には研究棟、医科大、留学生向けの宿舎のみならず地下1階にはレストラン街やミニデパートなども併設されています。手術室は72部屋あり、年間の総手術件数は約70000件とケタ違いの数を誇ります。私は整形外科の手外科グループを訪問致しました。グループを主宰するJK Kim教授は、一般的な手外科手術に加え、腕神経叢や先天異常を得意とされています。私が見学したのは舟状骨の偽関節手術や橈骨神経麻痺に対する腱移行術などそれほど特殊なものではありませんでしたが、Kim教授の手術の正確さとスピードには大変感銘を受けました。AMCの先生方と討論する中で感じた日本との最も大きな違いは、allograftに対する認識です。日本では必要な設備や手続きの煩雑さという点でallograft使用に対するハードルは非常に高いと言えますが、韓国では日本と比較して割と一般的に使用されているようです。多くの施設において、移植骨量が不足した場合に



ASAN Medical Centerをバックに



JK Kim教授と

人工骨で補填せざるを得ない日本と比較し、韓国はかなり先を進んでいる印象を受けました。残りの1日は外来見学をさせていただきました。2部屋を往復しながら3時間で50~60人ほどを診察されており、その要領の良さに感心しながらも当院のような施設ではとても真似できないシステムだと感じました。

KSSH meeting

学術集会は11月4日にソウルのEwha Womans University Seoul Hospitalにて行われました。開催期間は1日で会場も4部屋であり、日手会と比較すると小規模でしたが、討論自体は十分に盛り上がりを感じることができました。また、発表スライドはすべて英語で作成されており、一部の先生はプレゼンテーションも英語でされていました。この点については、個人的には日手会でも取り入れてみても良いのではないかと感じました。私はtraveling fellow sessionにて、重症開放骨折に対する軟部組織再建のテーマで15分の講演をさせていただきました。海外の学会においてinvited speakerという立場で話をする機会はそうそうあるものではありません。大変貴重な経験をさせていただいたことに感謝を申し上げる次第です。

Gwang Myeong Sung Ae General Hospital (GMS)

翌週は、11月6~8日にGMSを訪問致しました。GMSはAMCと異なり、中規模の病院です。私の滞在した形成外科は、主に手外科とマイクロサージャリーに特化しており、カンファレンスに参加した印象では特に指の外傷が多い印象でした。訪問初日には幸運にもJS Kim先生の切断指再接着術に参加することができました。Kim先生は、これまでに約3000本の再接着術を手掛けてきたとのことで、その流れるようなマイクロの所作には感動すら覚えました。昔はマイクロの技術を指導してくれる先輩もおらず、来る日も来る日も独力で再接着術の症例を積み上げていくことで現在の技術を会得したとのことです。2日目には、今回の学術集會会長であったDC Lee先生からpartial second toe pulp free flapの講義を受けた後、Lee先生の自家用車で明洞の半日観光に連れて行っていただきました。幾分スケジュールがタイトで自由時間を設けることができなかつたため、ちょうど良い息抜きになりました。最終日は、朝のカンファレンスにてミニレクチャーを行った後、Lee先生の外来見学を行って全ての日程を終了致しました。



学術集會にて(感謝状の贈呈式)



学術集會後のwelcome dinner

今回の訪韓を通じて、非常に多くの友人を作ることができました。特に今年の日手会でKSSHの traveling fellowとして来日されたIJ Park教授とHJ Kang教授には、こちらが申し訳なくなるくらい親切にいただき、彼らとは親友と言っても差し支えないくらいの関係性を築くことができました。また、Park教授やKang教授に限らず、韓国の先生方は皆ホスピタリティに溢れ、非常にフレンドリーな方ばかりでした。今回訪韓する機会をいただいたことで、私には今後もこの関係性を継続し、JSSH-KSSH間の架け橋になる責務があると感じています。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えて下さった岩崎倫政理事長、池上博泰担当理事、市原理司委員長をはじめとする国際委員の先生方、平素より御指導いただいております多田薫先生に心より感謝申し上げます。



学術集会会長のDC Lee先生と明洞の中心街にて



GMSの先生方およびIJ Park教授とfarewell partyにて

JSSH-TSSH Traveling Fellow報告記

木村 洋 朗

北里研究所病院 整形外科

私は台湾でおよそ2週間、学会参加に加えて、林口長庚紀念醫院 (Linkou CGMH) および国立台湾大学醫學院付設醫院 (NTUH) を見学させて頂きました。当初は7月の予定でしたが、学会が5月初旬に決まったことを急遽告げられ、慌てて準備をすることになりました。また、今回は昨年受賞された木幡一博先生と大部分、一緒に研修をさせて頂きました。

まず私はLinkou CGMHで研修をさせて頂きました。CGMHは台湾最大の医療グループで、そのmain branchであるLinkou CGMHは台北中心部からバスで40分程度西に向かったところに位置する、約4,000床の巨大病院です。整形外科、形成外科にはそれぞれ複数の専門チームがありますが、手術件数が日本とは桁外れです。皆様もご存知かもしれませんが、この形成外科 (Department of Plastic & Reconstructive Surgery: PRS) にはmicrosurgeryを学びに世界中から毎年多くのフェローが訪れており、重度四肢外傷や神経麻痺に対する複合遊離組織移植や神経移行などの高難度手術が日常的に行われています。私が訪れた際には、日本から林洸太先生が1年間のフェローをされている最中でした。林先生とは小郡第一総合病院に以前見学に伺った際に面識があり、事前に連絡



Luke先生 (中央) との記念撮影 (右が筆者、左が木幡先生)

を取らせて頂くことができましたが、実際に現地で再会して世界で活躍する姿を見せて頂き、非常に良い刺激を受けました。私たちはPRS Division of Trauma and Emergency Surgeryの手術を主に見学させて頂き、Cheng-Hung Lin教授(Luke先生)にはfree vascularized iliac bone graftやfree vascularized PIP transferについて、多くのご経験からの知見をご教授頂くことができました。また、PRSの他チームや整形外科の手術も数多く見学させて頂きました。

次に研修させて頂いたNTUHも約2,000床の大病院で、こちらは台北市中心部に位置しています。1895年に創設された大学の附属病院(現在の旧館)は日本人建築家により設計されているようです。こちらでは朝の整形外科カンファレンスで私達の研究内容をそれぞれ発表した後に、形成外科の先生が行われていた手術見学をさせて頂きました。別の日には台湾市内から車で1時間程度にある



Linkou CGMH手術室にて(左から2番目が林先生)



NTUH整形外科の先生方との食事会
(一番右がChih-Hao Chang教授、右から2番目がRex先生)

NTUH金山分院にも連れて行って頂き、病院長である整形外科Chih-Hao Chang教授の手術を見学させて頂きました。

NTUH整形外科の先生方はとにかくフレンドリーで、特にYun-Liang Chang先生 (Rex先生) はStanford大学に留学されていた経験があり英語が堪能でしたが、何よりとても親切でした。Rex先生はこちらが台湾に行く前からスケジュールを立てて何度もメールのやり取りをしてくださり、現地では病院研修以外でも夜市など観光地にも連れて行ってくださりました。このような素晴らしいホスピタリティを受けたことは過去に経験したことがなく、一生の思い出になりました。

学会は2日間、台北北部のTaipei Veterans General Hospitalで開催されました。学会自体は日本のそれとは異なり(?)、非常にアットホームな雰囲気でした。私は超音波とCTS-6を用いた手根管症候群の即日無侵襲診断法の臨床経験やその有用性について発表させて頂きましたが、発表時間が20分もありましたので、非常に濃密な討論を行うことができました。また、招待講演として慶應義塾大学スポーツ医学総合センターの佐藤和毅教授が肋骨助軟骨移植のお話をされており、台湾の先生方はその手技にとっても驚かれていました。その他、Luke先生の手同種移植やBunnellフェローであるFufa先生の舟状骨偽関節に対するvascularized medial femoral trochlea graftなど、私が経験したことのない手術手技に関する様々な講演を聞くことができました。

最後に謝辞を述べさせて頂きます。ご推薦頂いた慶應義塾大学整形外科の中村雅也教授、岩本卓士先生、日本手外科学会国際委員会の皆様および台湾担当でマネージメントして頂いた産業医科大学の善家雄吉先生、歓迎して下さった台湾手外科学会の先生方に厚く御礼を申し上げます。また、木幡先生と林先生には、書類の手続きから現地での行動に至るまで、色々と助けて頂きとても心強かったです。さらに、北里研究所病院整形外科の皆様には、赴任早々にも関わらず快く送り出して頂きました。皆様にサポートして頂いたお陰で、実りある研修を経験することができました。



学会での口演

手外科バトンリレー (第12回)

スキーと手外科のこつ

藤 哲

なかざわスポーツクリニック 弘前大学名誉教授

75歳の後期高齢者の仲間入りまで3週間となった時点で、この原稿を書いています。実は、先日、現在活躍中の若手手外科医二人にニセコスキー場に連れて行ってもらいました。競技スキー経験者のお二方にとって、私を引率して貰うのは申し訳ない気がしたのですが、『おじんスキーヤー』に徹底し、一度も転倒することなく無事に帰還してきました。

スキーは斜面に立つと自然に滑り始めるので、あまり力をいれる必要のないスポーツです。私は『転倒しないスキー』を心がけて滑っています。高齢者においては転倒など軽度の外傷で脊損になることが多いという、脊椎外科医の忠告を十分理解しているためです。

具体的には、雪を選び(新雪・ふか雪がbest)、滑走斜面を選び(硬いコブ斜面は避ける)、無謀なスキーヤーやボーダーがいないかをチェックし、できるだけ人のいないところを選んで滑るようにしています(図参照)。これが、現在まで大きなけがもなくスキーを楽しんできた私『おじんスキーヤー』の誇り(?)です。

もちろん、最も大事なことは、いかなる斜面でも、転倒せずに滑る技術を取得しておくことです。そのためには、できるだけ若いうちに(多少転倒しても大けがに至らない年齢)、習得することが大事であると思っています。

さて、最近『先生の手外科習練はどのようなものでした?』と聞かれることが多いのですが、まさにスキー習得と同じです。

スキー(手外科手技習練)は若いうちから始め、あらゆる斜面を(あらゆる技術・病態への対応)、技術を取得し、道具(手術器具)を選び、安全に滑れる(合併症を回避する)ように、適切な判断力をつける。

ありがたいことに私は現在も手術に呼ばれることが多いのですが、主として若い先生への指導を中心に行っています。

体力的には、手外科手術は座ってできることが多く高齢医師向けです。常にルーペを使用しているので目の問題もありません。手技は、肘を付いてできるので安定した操作が可能です。

また、手外科医がカバーする疾患・病態はとて多く多岐にわたるため、教科書に詳しく掲載されていないものもあり、若手の先生にとって私は保険(Insurance)的な存在としてお呼びがかかるのかと思っています。

しかし、患者さんのなかには、私を見て心配そうな顔をしている方もおり、『手術は若い先生と一

緒にやります』というホッとした顔になるのを見ることがあります。患者さんの(相手の)心を
読み、対処することも大事かと思っています。

整形外科医の中でお呼びがかかる機会が多いのは『てげかい』ではないでしょうか？人間にとっ
て、最後に残るのは教養であると言った学者がいます。飛躍しすぎですが、私にとって年をとって
も楽しくできるスポーツはスキーであり、最後に残る整形外科手技は手外科です。スキーは斜面に
立つと滑り出しますし、手の外科患者さんの手を見ると、自然に治療方針が浮かびます。さて手外
科医にとっての教養とは何なのでしょう？考えているところです。



2024.02 ニセコにて新雪を楽しむ筆者

局所麻酔薬使用時の合併症

日 高 典 昭

大阪市立総合医療センター 整形外科

手外科医は、腕神経叢部伝達麻酔下での手術やWALANT手術をしばしば行うため局所麻酔薬を扱うことが多い。近年の超音波診断技術の進歩により超音波ガイド下神経ブロックが一般的となったとはいえ、合併症は皆無ではなく、局所麻酔薬中毒、アナフィラキシー、神経損傷、神経毒性、迷走神経反射などが起こり得る。急変時の対応に慣れていない整形外科医にとっては、合併症の発生に備えて、あらかじめ対策を立てておくことが重篤化を防ぎ、患者への影響を最小限にするために重要と考えられる。

本稿で紹介する判例は、67歳女性の右肩関節脱臼の徒手整復時に腕神経叢ブロックを行い、局所麻酔薬中毒を発症し呼吸停止などから低酸素脳症に至ったとして約6,222万円の損害賠償を命ぜられたものである（京都地裁、令和3年11月9日判決）。この事例では、超音波診断装置ガイド下ではなく、放散痛を指標に斜角筋間ブロックを行い、180mgのメピバカインを投与している。担当医は投与時に血液の逆流がないことを確認した上でゆっくり注入したとしているが、点滴ルートは確保していなかった。投与後ほどなくして「眠い」という訴えが始まり、2-30分後には閉眼して立位がとれず、3-40分後には舌根沈下によるいびき呼吸が出現しており、50分後に救急車が到着したが、その時点で既に心肺停止状態であったという。患者は転送、転院の後に最終的には死亡した。裁判所は、担当医が投与後に行うべき全身状態の観察（血圧、脈拍、呼吸に加え、気分不快などの有無や薬効の程度）を怠ったとして担当医に注意義務違反ないし過失があったと認めたが、超音波ガイドの不使用については、過失の認定判断に影響するものではないとした。

本事例は過量投与とはいえませんが、投与後短時間で発症していることから血管内注入による局所麻酔薬中毒が疑われる。血液の逆流がないことは必ずしも血管内注入を否定できるものではなく、組織から移行する場合もあるため、麻酔後30分程度は慎重な観察が必要である。高齢者や併存疾患のある症例はリスクが高いため注意を要する。発症が疑われたら、麻酔科医の応援を仰ぎ、まずは呼吸管理を行う。重症例では脂肪乳剤の急速静注を行い、痙攣に対してはベンゾジアゼピン系抗痙攣薬を投与するが、これらはマニュアルを作成しておくことが望ましい。

一方、局所麻酔薬使用時のアナフィラキシーは、汎用されるアミド型局所麻酔薬では発生頻度は少ないとされるが、バイアル瓶に含まれる保存薬やラテックスによって起こる場合もある。症状としては全身性の蕁麻疹や紅潮、掻痒、眼瞼や口唇の浮腫などが特徴的であるが、それらがなくても急速な血圧低下や気管支攣縮、喉頭症状があれば可能性が高いとされる。アナフィラキシーと診断または強く疑われる場合は、アドレナリン（成人では0.5mg）を直ちに筋肉注射する必要があるため、局所麻酔施行時には必ず用意しておくべきである。

Joy の声 (第9回)

古 庄 寛 子

米盛病院整形外科

この度Joyの声のバトンを頂きました。少し変わった経歴を経て手外科医になりましたので、一例としてご紹介させていただきます。

福岡での初期研修時に整形外科に魅了され、当時の指導医の「女性だからやめておいた方がいいと思う。」という反対を押し切って、大阪大学整形外科に入局しました。当時から、女性医師の活躍をサポートする取り組みをされていたのが決めてとなりました。関連病院で研修する中で手外科医を目指すようになりましたが、卒後5年目に結婚し、夫に帯同するため医局を退局しました。間も無くして妊娠も発覚し、ここから子育てと、夫の転勤に伴う移動が始まりました。中華人民共和国での短期の滞在を挟んで東京で復帰してから、宮城、福岡、鹿児島へと移動し、鹿児島での勤務が7年目に入ります。



九州労災病院時代の手外科メンバー 中央：師匠の畑中均先生 右：高崎実先生

全国での研修

大阪大学の医局を退局後は、医局に属さずに、夫の勤務地に合わせて移動していますが、整形外科専門医も手外科専門医も、各地域の医局の先生方にご指導いただかなければ取得は困難であったと思います。手外科の研修を主に行った福岡では、九州大学の先生方にご指導いただきました。師である畑中先生には、退職後も何かにつけて相談にのっていただいています。

現在の勤務地である鹿児島でも、鹿児島大学の先生方のご好意で、勉強会や症例相談、手術見学と大変お世話になっています。門戸を叩くと、医局員かどうかに関係なく、熱心にご指導くださり、本当に感謝しかありません。

子育てと手外科従事

鹿児島での勤務が7年目に入ろうとしています。現在勤務の病院は、整形外科の年間手術件数が4300件以上と、多くの外傷や変性疾患を扱う病院です。鹿児島への異動が決まったのが2人目を出産直後であったため、託児所があり早期復帰が叶いそうな事から就職しました。育児中の女性医師の勤務は初めてとの事でしたが、子供の成長に応じて働き方をフレキシブルに変更するオーダーメイドの復職案を受け入れていただきました。私の入職以後、同様に5名の子育て中の女性医師が入職しており、働き方改革の流れから病院の変化も感じています。

全国を転々とする生活も落ち着き、子育ても少し余裕がでてきました。

立場や環境、子育て、コロナ渦など、その時々により大変さは変化しますが、どんな時もキャリアを継続しておいて本当に良かったと思っています。これまでサポートいただいたご恩を胸に、地方における手外科医の育成に少しでもお役に立てるように務めてまいります。



米盛病院理事長米盛公治先生と。ずっと変わらずサポートいただいています。

上肢骨接合術における 3次元術前計画

吉井 雄一

東京医科大学茨城医療センター

皆さまは、骨折治療における術前計画をどのように行っていますか？私は研修医のときにX線画像をトレーシングペーパーに転写して行う方法を先輩から教わり、以来それを実践してきました。しかし、診療画像のフィルムレス化や3次元画像の広範な活用により、トレーシングペーパーでの術前計画は、日常診療にそぐわなくなってきたと感じていました。

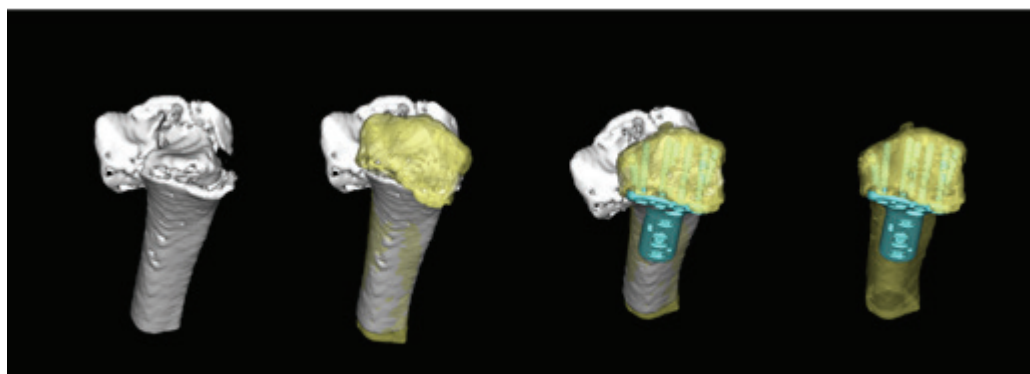
そこで骨折などの日常的な手術において、コンピュータシミュレーションを導入してみようと考えました。骨折を3次元的に視覚化し、整復やインプラント選択・配置を事前にシミュレーションするプログラムです。術前計画の3Dシミュレーションは2000年代より普及し始め、人工関節手術では広く用いられています。一方で、骨折治療においては大腿骨近位部骨折のアプリケーションがありましたが、まだ実用性に乏しいものでした。そこで人工関節の3D術前計画ソフトウェアを販売していたレキシー社に相談して、2015年から共同研究が始まりました。



図1

骨折治療における3D術前計画の課題は、多様な骨折型や骨接合材のある術前計画をいかに効率的に行えるかにあります。まず初めに取り組んだのが橈骨遠位端骨折です。掌側ロックングプレートの普及に伴いインプラントも多種多様でどのインプラントを用いるか悩むことも多いと思います。日常的にCTの評価は行われていたため、そのCTデータを活用して術前計画を行うことを考えました。CTデータをソフトウェアにインポートし、橈骨のみを抽出して骨折の3次元形状を視覚化します。次に骨切り面を設定して骨片を分離します。粉碎骨折や陥没骨折の場合、骨片が正確に分離できないこともあります。うまく骨折線にそって分離できなくても、あらためて別の部位で骨切りを行ってグループ化することで、骨片の形状にそった分離が可能になります。そのうえで、各骨片を整復位に移動します。次に整復モデルにインプラントを配置します。骨片の被覆を考慮してインプラントを配置し、適切な長さのスクリューを選択します。Polyaxialスクリューの場合には、可変するスクリューのイメージを作成することもできます。こうして完成した術前計画の画像を手術室に持ち込み、手術中には術前計画を再現するように手術を行います(図1)。これらの術前計画に要する時間は15~60分ほどです。複雑な骨折型の場合、より長く時間がかかりますが、転位の程度を把握するだけであれば健側鏡像と比較してインプラント設置イメージを作成するだけでも十分です(図2)。現在は肘関節や手指の骨折にも応用範囲を広げ、その実用性を検証しています。

近年、医用画像処理技術はより高度なものになってきました。私たちの施設でもより簡便にこれらの技術を活用できるように、情報工学系の研究者とも連携してさらなる改良に努めています。日本手外科学会の皆様に少しでもお役に立つような技術になるよう努力していきます。3D術前計画の活用についてなにかご意見などありましたら、学会などでお声かけいただければ幸いです。今後ともよろしく願いいたします。



健側鏡像との比較による整復位とインプラント設置のイメージ
白：患側、黄：健側鏡像

図2

委員会報告

■常設委員会

緊急事態対応委員会

担当理事 **西田 圭一郎**

前回のニュースレター後、委員会としての活動はありませんでした。引き続き、突発的な事態に対して各委員会の枠組みを超えた迅速な対応・判断が必要となった場合に活動してまいります。

財務委員会

担当理事 **西田 圭一郎**

委員長 **三浦 俊樹**

メンバーは担当理事 西田圭一郎(岡山大学)、委員長 三浦俊樹(JR東京総合病院)、委員 若林良明先生(横浜市立みなと赤十字病院)、小寺訓江先生(日本医科大学)、柳林聡先生(新東京病院)、吉田進二先生(東海大学)、事務局は広野・中原・三島氏(アイ・エス・エス)です。2023年度財務委員会は第1回を3月14日に、第2回を12月11日にWeb開催しました。

第1回委員会では2022年度収支決算報告書の確認および2023年度予算案を審議し理事会へ提出し、4月19日の代議員総会にて承認されました。

2022年度収支決算では、予算より収入が約1500万円増加、支出が約600万円減少し、全体として一般正味財産期末残高は257,987,603円となり、前年度に比べ19,677,331円増加しました。主な内訳として、学術集会開催費は収入・支出とも予算より増加、インターネット関連費用ではシステム開発が遅れており約780万円少ない支出となりました。第65回学術集会の余剰金については税金等を差し引いた金額の半額を産業医大に寄附することが審議されました。

第2回委員会では2023年度収支状況(10月まで)の確認、2024年度予算案の審議、第66回学術集会の決算報告が行われました。

2023年度の収支状況では、為替(円安)や価格高騰(会場費、印刷費等)の影響で予算を超えている費用が支出されています。2024年度予算案は各委員会からの予算書、第67回学術集会収支予算案等を元に審議されました。収入の部では、バナー広告2社の辞退により広告掲載料(60万円)がなくなります。支出の部では、機関紙(オンラインジャーナル)発行の委託をKCSからアトラス社の

Editorial Manager[®]とジャーナルサポート株式会社の利用に切り替えることで前年度より約270万円予算を抑えることができました。新規事業として天児民和賞や国際交流活動費の増額が計上されました。すべての事業が行われるとすると、約2250万円の赤字となる見込みです。

昨今の円安や物価高騰の影響で諸費用が上がっている一方で各委員会には会議のweb開催等により経費削減にご協力いただいております。活発な学会活動と健全な財政を両立すべく、引き続き会員の皆様のご理解・ご協力を宜しくお願いいたします。

教育研修・オンラインマガジン運用委員会

担当理事 村瀬 剛
委員長 小笹 泰宏

委員会はwebで3回開催いたしました。

2023年度はまず、4年ぶりに開催となった“第5回日本手外科学会カダバーワークショップ”が委員会で行う最初の行事となりました。会期は2023年8月4日(金)、5日(土)で札幌医科大学の解剖実習室で開催されました。手関節鏡コース3グループ、皮弁コース7グループに61名の応募があり、それぞれ9名、28名の参加者を選抜し、講師は現委員の先生方の他、中山政憲先生、多田薫先生、太田英之先生、金谷耕平先生にご協力いただきました。インターハイ開催と時期が重なり、交通、宿泊施設の手配が危ぶまれましたが、講師、参加者全員に参加頂き、初日は小野先生、辻井先生による講義が行われ、2日目は5遺体10上肢を用いての実習を行いました。実習後のアンケートでは、97%の参加者が有益であり、また参加したいと回答し概ね好評な結果でありましたが、開催時期や実習時間、用意する器具、講義資料に対する要望もあり、次回以降の開催をさらに良いものと出来るように検討していきたいと思っております。

教育研修会については、対面で生の質疑応答をしたいという意見もございしますが、自分にあったペースでじっくり学習できるといった利点は大きく、今年度もオンラインでの開催となりました。昨年と同様、1時間のレクチャーを7つ、30分の論文レビューを6つの構成で2024年1月20日から3月20日まで開催の予定です。2024年度も委員会での議論の結果、オンラインでの開催が決定しています。2025年度は開催時期や開催場所などの議論を早めにして、ハイブリッドでの開催も検討したいと思っています。

HandNowのコンテンツの一つの“backstories”は、学術集会で優秀演題に選ばれたものを取り上げ、それぞれの先生に研究の背景や苦労した点などを伺い載せています。インタビューや編集など、大変時間と労力を伴う作業なのですが、中川先生が中心となり、鈴木先生、丸山先生とともに作成いただき、素晴らしい仕上がりとなっています。“Q&A”は日本手外科学会誌の総説の設問を載せています。齋藤先生が担当となり専門医試験委員会、編集・用語委員会と連動して作成し、手外科専門医試験の受験を予定している先生方に役立つ内容となっています。そのため、総説を依頼された先生はご面倒でも、設問の編集作業にご協力いただきたいと思います。“オンラインレクチャー”では昨年度と同様に教育研修会の論文レビューコーナーを再掲載する予定です。オンライン教育研修会を見逃した方も、是非ご視聴ください。“自由投稿動画”には現在3編の動画が掲載されています。投稿頂い

た動画は委員会で査読しておりますので、投稿規定を参考に引き続きご応募頂ければ幸いです。

最後に委員の先生やカダバワークショップの講師、教育研修会の講師の先生方には大変な労力を費やして頂いて感謝申し上げます。今後も会員の皆様の役に立つ研修会、コンテンツを企画して参りますので、会員の皆様のお力添えをお願い申し上げます。

編集・用語委員会

担当理事 池口良輔
委員長 小田良

2023年度の編集・用語委員会は、担当理事は池口良輔（以下敬称略）、委員長は小田良が昨年から引き続き担当しています。26名の委員は、石河利広、入江徹、恵木丈、大井宏之、織田崇、河村太介、金城政樹、栗山幸治、小園直哉、小林由香、坂本相哲、佐々木裕美、佐竹寛史、篠原孝明、頭川峰志、園畑素樹、高松聖仁、辻本律、土田真嗣、長尾聡哉、那須義久、藤巻亮二、松井雄一郎、松末武雄、山部英行が昨年度からの継続で、新たに棚木弘和が加わって活動しています。

2023年度の編集・用語委員会の主たる活動内容は、日本手外科学会雑誌第40巻の発行と第7回学会奨励賞（田島達也賞・津下健哉賞）の審査・選定です。本年度もすべてweb会議により委員会を開催いたしました。本年度も2020年から引き続き総説を各号に2編ずつ掲載しております。総説のテーマは、手外科専門医研修のカリキュラムから選定し、同時に掲載される学術論文・自由投稿論文とともに手外科医を目指す多くの先生方に読んでいただけるように、各分野で活躍されている先生方に執筆を依頼しております。総説にはそれぞれ設問を2問用意し、専門医試験委員会で査読いただいたうえで掲載しています。総説のテーマに関する知識整理や専門医試験にお役立てください。総説執筆を担当していただいた先生方とその査読を担当していただいた先生方におかれましては、日常診療でご多忙にもかかわらず快く引き受けていただき、この場をお借りして御礼申し上げます。

本年度も日本手外科学会雑誌の質の向上を目指す観点から、厳正な査読を行いました。2024年1月現在、2023年度の論文投稿総数は219編で、採用180編、不採用21編、審査中18編と採用率は82%でした。教育的な観点からも査読による改訂を重視し、さらに不採用となった論文に対しては、今後の研究につながるような査読コメントを心がけております。不採用であってもぜひ研究を継続していただき、データを積み重ねて共著者と十分に推敲した上で自由投稿論文として再投稿していただきたいと思っております。

第7回学会奨励賞（田島達也賞・津下健哉賞）については、公募の中から2名の候補者を当委員会にて選定し、理事会承認を得て、田島達也賞は上村卓也先生、津下健哉賞は佐伯伯治先生に決定しました。両先生は2024年4月25日～26日に開催される第67回学術集会総会で表彰される予定です。

さらに当委員会では必要に応じて手外科用語に関する改変を行い、会員ホームページに手外科用語集を掲載しております。

本年度の大きな事業として、古くなった投稿・査読システムを全面的に刷新いたしました。次年度の第41巻からは、先生方も使い慣れておられる「Editorial Manager」で投稿と査読を行い、「J-STAGE」で公開します。これに伴い、編集事務局は京葉コンピューターサービスからジャーナルサポートに変

更いたしました。できるだけスムーズに質の高い会誌として刊行できるよう、委員会の総力を挙げて取り組んでいます。ご意見やご要望等いただければ幸いです。

また、本年度は会員に論文作成と投稿規定の注意点などを呈示することを目的として「日手会誌の投稿についてのコンテンツ」を編集・用語委員会で作成しました。日手会のホームページに掲載されていますので、特に若手の先生方にぜひ閲覧いただきたいと思います。

本年度の第40巻は、2号が2023年11月27日、3号: 12月11日、4号: 2024年1月29日に発刊され、以降5号: 2月26日、6号: 4月15日発刊予定です。遅滞なく発刊するためには、代議員の先生方の期限内の査読が不可欠です。編集委員一同もより一層の努力をしておりますので、今後ともご協力のほどお願い申し上げます。また会員の皆様におかれましては、引き続きご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

機能評価委員会

担当理事 村瀬 剛
委員長 金内 ゆみ子

2023年度の機能評価委員会は、担当理事は村瀬剛先生、委員は西脇正夫先生、阿久津祐子先生、志村治彦先生、飯塚照史先生、茶木正樹先生、小田桐正博先生、金内という昨年度と同様のメンバーです。現委員での活動はWeb会議を中心にすすめてきましたが、第66回学術集會会期中にはじめて対面の委員会を開催しました。

活動内容

I. 前腕回旋角度測定方法のアンケート調査

前腕回旋角度測定 of 移動軸に関して、日本整形外科学会が手掌面を推奨していますが、手関節レベルでの報告も多くみられます。そこで、前腕回旋角度測定の実態調査を目的に、2023年5月に日手会会員を対象にWebアンケートを実施し、962名の回答をいただき(回答率: 26.7%)、「移動軸は手関節レベルが52%」と判明しました。様々な測定方法の工夫が行われており、詳細は会員ホームページ(HP)で公表中です。本アンケートの結果をもとに、信頼性のある実用的な測定方法の基準化が検討されます。

II. 第66回学術集會シンポジウム企画「手の機能評価の原点と挑戦」

3名の委員が口演しました。

- ・日本ハンドセラピィ学会作成の関節可動域・握力測定マニュアルについて(飯塚)
詳細なマニュアル作成の経過報告。
- ・デジタル角度計を用いた手外科領域の可動域測定の有用性の評価(阿久津)
機能評価委員の各施設が協力し、3D立体造形モデルでデジタル角度計の信頼性を検証。
- ・握力測定の現状と課題(金内)
握力測定の実態調査[会員対象のWebアンケート(2022年)]に基づき課題を検討。

Ⅲ. 日本ハンドセラピィ学会 (日ハ会) との連携

米国ハンドセラピィ学会に準じた日ハ会作成の「握力計測マニュアル (Jamar型握力計)」について、文献的考察も加え当委員会で改訂版を作成しました (日手会監修)。日手会HP「手の機能評価法」より日ハ会HPへリンクし使用できます。

Ⅳ. 新たな機能評価方法の検討

1) 上肢 ROM測定方法

AIを使用した研究が多施設で進んでおり、新しい技術と連携した開発が検討されます。10月のWeb委員会では神戸大学の乾淳幸先生にMediaPipe (Google) につきご講演いただきました。

2) 実用的な握力測定マニュアル

現在普及しているSmedley式握力計の測定基準が必要です。また、市販のロードセル式握力計とJamar式握力計の信頼性を当委員が中心となり研究しロードセル式握力計の信頼性と、両握力計の1回測定 of 十分な信頼性を報告しました。この結果は実用的なマニュアル作成の参考になると思われます。

3) 有効性が検証され世界的に使用される評価方法の日本語版の開発

DASHの日本語版が開発されたように、新たな世界基準の評価方法の開発が望まれます。

本年度も会員の皆様にアンケート調査のご協力をいただき心より感謝申し上げます。今後とも皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

国際委員会

担当理事 池上博泰
委員長 市原理司

国際委員会は池上博泰担当理事、市原理司委員長のもと、秋田鐘弼、岩本卓士、宇佐美聡、川崎恵吉、善家雄吉、多田薫、長尾聡哉、中島祐子、森崎裕の委員と、柿木良介、金谷文則、中村俊康、村田景一のアドバイザーから構成されていましたが (五十音順、敬称略)、2023年4月から吉田史郎先生が新たに加わって総勢16名となりました。

トラベリングフェロー関連

2023年4月に開催された第66回日本手外科学回学術集会 (東京) 期間中に、4年ぶりとなるトラベリングフェローセッションとフェローランチが開催され、海外からのフェローと活発な意見交換を行うとともに懇親を深めました。2023年12月には東京 (品川) で2024年度トラベリングフェローの選考を行いました。選考の結果、JSSH-ASSHトラベリングフェローとして宮村聡先生、河村真吾先生の2名を、Asian exchangeトラベリングフェローとして中島祐子先生 (台湾)、有光小百合先生 (韓国)、大西正展先生 (香港) の3名を選出しました。選出されたフェローの先生方には、是非積極的に各国

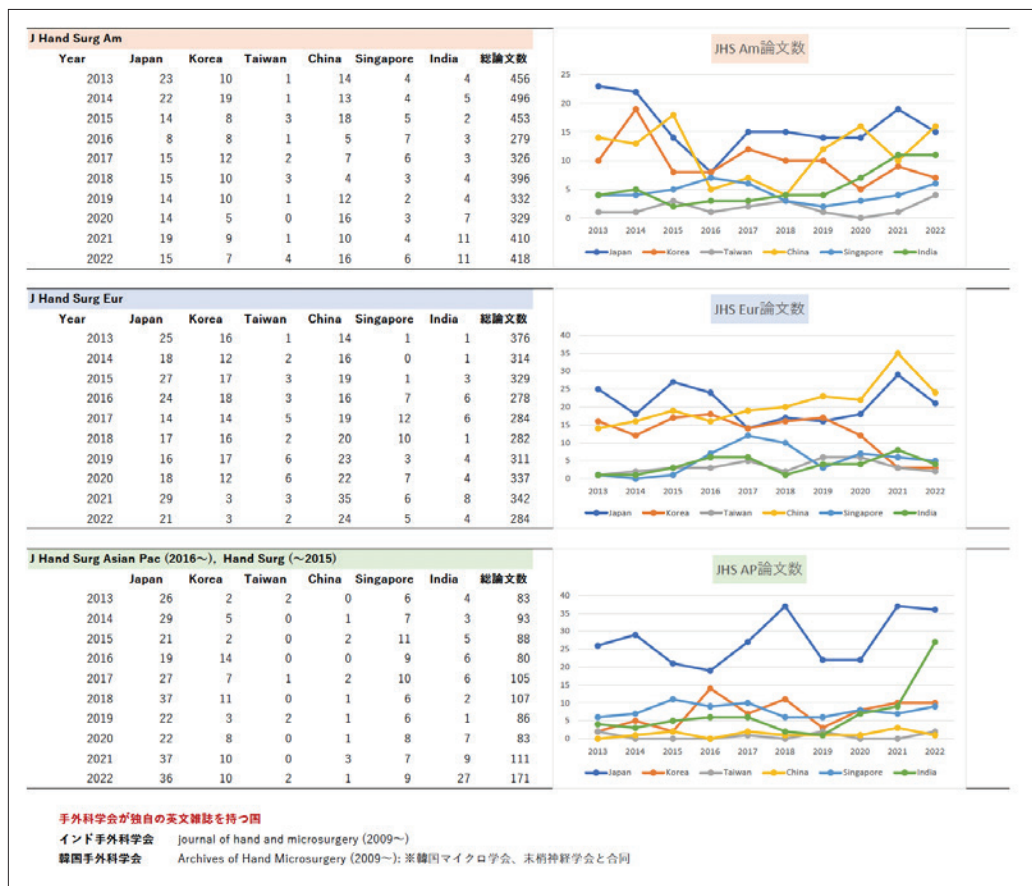
のフェローと交流して、JSSHの国際的プレゼンシー向上に貢献して欲しいと思います。

APFSSH in SingaporeでのJSSH会員懇親会開催

2023年6月のAPFSSH(シンガポール)でAsian Pacific Pioneer of Hand Surgery1986-2023記念誌である“Crafting A Legacy”にJSSH から17名のPioneerの先生方が選出されたことを記念して、国際委員会主催でのJSSH懇親会を現地で開催しました。岩崎理事長をはじめとして、30名以上の会員の先生方に参加いただき世代の垣根を超えて親睦を深めて頂きました。

ジャーナル掲載数の評価

JSSHのacademic activityの現状を把握し、特に若手から中堅の会員が国際雑誌に論文を掲載するmotivationを上げることを目的に、2023年から宇佐美聡委員を中心として手外科関連の海外主要ジャーナル(JHS Am, Eu, AP)へのJSSHからの掲載数の評価を開始しました。添付のデータを参照頂くとアジアの中でのJSSHの相対的地位は低下しており、会員数で補正をするとそれがより顕著になります。現状を打開するために今後も右肩上がりになることを期待して継続的に調査していく予定です。本データは、日手会ホームページでの公開、総会での報告、学会員が何らかの発表をする際に使用しても良いことが理事会で承認されています。今後は新たな試みとして海外一流紙に掲載された基礎・臨床論文を日手会ホームページなどで紹介することも検討していきたいと考えております。



2024年以降の予定と展望

2024年5月に開催予定の台湾手外科学会(高雄)に招待国としてJSSHが招待されることが決まり、国際委員会委員を中心として現地を訪れ、“Innovation”をテーマに日本の手外科の最前線に関する講演を行う予定です。また、2025年3月にはIFSSH/IFSHT triennial congressが米国(ワシントン)で開催予定であり、JSSHからICL, Moderatorとして多数の先生方に参加頂く予定です。また少し先の話にはなりますが2029年にAPFSSHを日本で行うことが正式に決まりましたので、今後は日本での国際的な手外科学会成功に向けて国際委員会が中心となって綿密な準備を進めていく予定です。今後もJSSHの国際的プレゼンス向上のために、国際委員会では多くのことに取り組んでいきます。若い会員の先生方にも国際学会へ積極的に参加し英語での講演に挑戦して頂くために、委員会としても様々な支援を検討しておりますので奮って参加をお願いします。

広報渉外委員会

担当理事 **古川 洋志**
委員長 **佐藤 光太郎**

令和5年度の広報渉外委員会は昨年同様コロナ禍のため全てweb開催となりました。

メンバーは理事古川洋志先生、アドバイザー岸陽子先生、委員長佐藤光太郎、金谷耕平先生、堂後隆彦先生、原友紀先生、中川夏子先生、宮崎洋一先生(新)です。第1回委員会は6月22日、第2回委員会を10月30日に、さらに臨時のアンケート調査を行いました。

広報渉外委員会は1)ホームページの管理、変更 2)日手会ニュースの作成 3)手外科シリーズの改訂、4)日整会シンポジウム、パネルディスカッションへの提言 5)日手会の広報を中心に活動をしております。

今年度はホームページの修正を念入りに行いました。トップページのバナーを追加、イベントやお知らせのページなどの追加を行い会員の皆様や手外科を目指す若い医師が閲覧しやすいようにしました。日手会ニュースに掲載していた研修施設紹介はホームページの研修施設のご案内から閲覧できるようにしました。

日手会ニュースは9月に58号、3月に59号を発行しております。連載としては手外科バトンリレー(11回)、手外科医のリスクマネジメント(15回)、Joyの声(8回)が長く続いております。新しく始まったリレーエッセイ形式の技術紹介では、今回は日手会で行われたシンポジウムから採択して技術の紹介を連載しています。

手外科シリーズの改訂はNo24.母指MP関節靭帯損傷、No.25合指症、No.26母指多指症、No27.TFCC損傷について話し合いを行いました。これらはいずれも2011年に作成されたもので12年が経過していました。新しい知見や治療法がどんどん出てきておりますので、現在の治療に合うように順次改訂していきたいと思えます。

また手外科シリーズの病院の広報等に利用する場合の使用許諾の依頼が多数参りましたが、条件

として、a) 営利目的ではないこと b) 出典を明記すること (日手会ホームページからの引用であること) c) 加工は加えず使用すること d) 掲載誌 (紙) を事務局にPDFで提出することを条件として許可しております。

日整会 (2024年5月開催) にはシンポジウム案として手外科における技術革新と医原性神経損傷の提言を行いました。

日手会の広報としては将来展望戦略委員会との共同企画で手外科認知度向上のポスターを作成し専門医のいる823施設へ送付しました。また8月10日のハンドの日に合わせ、新聞広告産経新聞のテレビ欄にハンドの日の新聞広告を掲載しました。

社会保険等委員会

担当理事 **田尻 康人**

委員長 **建部 将広**

令和5年度社会保険等委員会は、田尻康人担当理事の下、亀山 真、鈴木拓、中山政憲、藤田浩二、普天間朝上、松浦慎太郎 (50音順、敬称略) と委員長の建部将広の計8名で活動を行っております。社会保険等委員会の活動は、外科系学会社会保険委員会連合 (以下外保連) の手術、実務、麻酔、処置、検査各委員会へ委員を派遣し外保連活動への協力を行っております。日手会としては2年ごとに行われる診療報酬改定に関連した事業を行っております。具体的には、新規申請ならびに改正申請の学会からの要望を作成・提出しています。また、診療報酬改定に関する情報を学会会員と共有することなどを事業として行っております。

直近の事業内容および今後の予定について、ご報告申し上げます。

A. 会議日程

第1回：令和5年4月21日

第2回：令和5年5月15日 (web会議)

第3回：令和5年7月6日 (web会議)

このほか、適宜メール審議を行っております。

B. 令和6年度診療報酬改定の提案：下記3点について学会から提案していました。

① 手術14通則へのK059-2関節鏡下自家骨軟骨移植術の追加 (日本整形外科学会との共同提案)

K059-2関節鏡下自家骨軟骨移植術は手術通則14に記載されておらず、同一術野または同一病巣につき、2以上の手術を同時に行なった場合、主たる手術の所定点数しか算定できないため、通常の自家骨軟骨移植と同様に算定できるよう要望しました。

② 複雑な腱手術に対する入院外加算 (K035腱剥離術、K039腱移植術、K040腱移行術)

近年、エピネフリン含有リドカインを用いたWide awake surgeryが普及しており、腱の手術において、覚醒した状態で自動運動を確認しながら手術を行うことで、従来法と同等以上の成績が報告されています。麻酔前後の入院全身管理が不要で外来手術が可能である一方で、出血コント

ロールや術中判断など手術自体の難易度が上がることへの評価が十分なされていませんでした。入院せずに覚醒した状態で腱の手術を行った場合の加算を要望しました。

③ K098 手掌屈筋腱縫合術の廃止(日本整形外科勤務医会との共同提案)

K098 手掌屈筋腱縫合術は手術通則14の「指に係る同一術野」、同一手術での複数手術の特例に該当する術式ではなく、(前腕から手根部における)複数腱縫合加算も算定できません。汎用性も診療報酬点数もより高いK037 腱縫合術で代用可能と判断し、削除の要望をしました。

結果は①②については採択されず、③の廃止については採択されました。残念ながら改定の要望は採択されず、また、外保連としての改定要望についても全体として2割ほどの採択率となっていました。理由は医療費削減という逆風もありますが、下記に示すように高いレベルのエビデンス・ガイドラインでの記載が必要となってきていることにも一因はあると思います。

***厚生労働省に提出する資料について**

技術新規申請/改正申請にあたっては、エビデンスやガイドラインによる有効性の証明、実診療での実績が求められるようになっております。外保連への要望書作成にあたり、代議員の皆様には実態調査へのご協力をお願いさせていただく予定です。お忙しいと存じますが、ご協力の程よろしく願い申し上げます。

C.学術集会における保険診療に関するセミナー

第67回学術集会では委員会からの提案として教育研修講演を行う予定です。支払基金側から順天堂東京江東高齢者医療センターの岩瀬嘉志先生にお願いし、社保委員会側から30分ずつ講演する機会をいただきました。今後は手外科学会の委員会活動の一環として保険診療に関するセミナー開催を行うことを検討しております。

D.外保連活動

「整形外科領域のKコードを部位別に見直す検討会議」が発足し、日手会社保委員会からは建部が担当として草案をまとめました。令和8年度での診療報酬改正の際に合わせて、整形外科領域のKコードの再編を行う予定となっています。

診療報酬改定に際してだけでなく、今後も会員の皆様からの保険診療に関してご要望がある場合には、対応可能か検討させていただきますので、ご意見を頂戴できればと思っております。

先天異常委員会

担当理事 **福本 恵三**
委員長 **齊藤 晋**

先天異常委員会の主な活動は、手の先天異常懇話会の開催、手先天異常のエビデンス向上の取り組み、手の先天異常症例相談窓口の運営などがあります。本委員会活動により日手会員の先天異常手診

療に少しでも役立つ情報を発信できることを目標にしています。

【手の先天異常懇話会】

第66回学術集会期間中の2023年4月21日に第61回手の先天異常懇話会を開催しました。近年、日整会単位取得への配慮から1時間全てを講演に当てていましたが、第60回手の先天異常懇話会から、講演と症例検討のハイブリッド形式とさせて頂きました。第61回の講演テーマは母指化術とし、ご経験の多い9名の先生方(射場浩介先生・柿木良介先生・川端秀彦先生・関敦仁先生・関口順輔先生・鳥谷部荘八先生・根本充先生・日高典昭先生・堀井恵美子先生、以上あいうえお順)に母指化術のコツやピットフォールをご講演頂きました。症例検討会では3施設より応募がありました。東京慈恵会医科大学山住彩織先生が合指症を含む多発先天異常を、仙台医療センター岡田誉元先生が尺側列形成障害の症例を、長野県立こども病院野口昌彦先生がManskeⅢ型裂手の症例を提示され、活発な討議がなされました。

【手先天異常のエビデンス構築の取り組み】

ご存じの通り、手の先天異常の中には母指多指症のように比較的頻度の多い疾患もあれば、ほとんど経験することの少ない稀少疾患もあります。これまで本学会の先達のご尽力により先天異常分類マニュアルが作成されましたが、診療ガイドラインの基盤となる治療法のエビデンスについては未だ発信できていません。例えば、頻度の高い日手会4型母指多指症であっても、骨切りを適応する医師もいれば、骨切りを行わない医師もおられると思います。そこで、先天異常委員会のメンバーで母指多指症に関する研究を企画しました。母指多指症には様々な形態バリエーションがありますが、2022年に委員長の高橋氏が発表した母指多指症の「重複領域」概念(重複母指間の合指高位と骨格分岐高位の複合)を用いることにより、多様な形態バリエーションを整然と分類することができます。重複領域のタイプ毎に手術オプションと治療成績を比較して、各タイプに適切な治療法を探索するのが目的です。出来る限り多くの症例データを集積するために、多施設共同研究としました。2年計画で研究を進めてまいりたいと存じます。会員の皆様のご支援を宜しくお願い致します。

【構成員】担当理事：福本恵三、アドバイザー：関敦仁、(以下委員・敬称略) 柿崎潤、洪淑貴、佐々木薫、佐竹寛史、高木岳彦、鳥谷部荘八、根本充、西村礼司、齊藤晋

倫理利益相反委員会

担当理事 **福本恵三**
委員長 **安田匡孝**

2023年度の本委員会は昨年度と同様、担当理事の福本恵三先生、外部アドバイザーの塚田敬義先生、アドバイザーで前委員長の辻本律先生、外部委員の山我美佳先生、委員の楠原廣久先生と佐々木信幸先生、そして私、委員長の安田匡孝でスタートしました。基本的に毎月の新入会申請者の認定審議をメールで行います。7月からは、情報システム委員会で構築していただいたオンライン入会システムを使用

しての審査を始めました。審査がスムーズになったと感謝しています。昨年度に、最新の日本医学会COI管理ガイドライン2022にそって本学会のCOI指針、細則、Q & A、本委員会規程を見直し、理事会で承認されました。例年年度末に行っていた、役員等のCOI自己申告書の供覧を前倒しで、2023年6月にオンライン会議で終わりました。今年度から審議結果を該当申告代議員と所属委員会担当理事に通知することになりました。Q & Aの見直しの中で、学術集会演題募集時のCOI申告書が本学会事務局に送付されていないことが判明し、理事会審議を経て、今後学術集会運営事務局に周知することとしました。2024年の奈良市での学術集会では、演題応募時のCOI申告書が学会事務局に送付され保管されています。その申告書をどのように活用するかは、学会会長に委ねられています。以上ですが、関係の皆様へ深謝します。

学術研究プロジェクト委員会

担当理事 松田 健
委員長 加地 良雄

【構成員】

2023年度学術研究プロジェクト委員会の構成員は、松田健担当理事、加地良雄委員長、岡田充弘委員、金谷貴子委員、櫻庭実委員、佐藤光太郎委員、四宮陸雄委員、関敦仁委員、園畑素樹委員、高木岳彦委員、森谷浩治委員です。英語論文賞の創設などに伴う審査業務の負担が増えたため、本年度より委員を2名増員いただきました。

【活動内容】

web会議を2023年12月18日に開催し、2023年度学術研究プロジェクトの選出、2024年度学術研究プロジェクトテーマの選定、過年度プロジェクトの進捗状況確認、英語論文賞の選出などを行いました。その他、適宜メール審議を行いました。また、天児民和賞の募集業務、学会と学術集会の連携強化(委員会企画セッションの提案)の窓口として各委員会への企画募集業務などを行っています。

<2023年度学術研究プロジェクトの選出>

今年度の研究テーマは①手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究、②実臨床に寄与する基礎研究、③手外科領域におけるAI診療として募集を行い、17件の応募がありました。

新規性・独自性、妥当性・実現性、研究デザイン、国際性、倫理面への配慮等を評価項目として厳正な審査を行い、下記2件のプロジェクトを選出し、それぞれに50万円の助成をすることとしました。(順不同)

- 脳は手をどのように制御しているか～腱移行術後の中枢神経系適応過程の解明

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 原 友紀 先生

- 種々の組織由来幹/前駆細胞のメカノシグナルによる固有分化制御機構の理解と腱損傷治療への応用

岡山大学病院 整形外科 中道 亮 先生

<2024年度学術研究プロジェクトテーマの選定>

2024年度学術研究プロジェクトの助成総額は100万円とし、テーマは次の3つを選定しました。

- ① 手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究
- ② 実臨床に寄与する基礎研究
- ③ 胸郭出口症候群

<過年度採用学術研究プロジェクトの進捗状況の確認>

過年度採用学術研究プロジェクトの進捗状況を確認しました。

<英語論文賞について>

今年度の英語論文賞には10名の応募がありました。Impact Factor、関連する代表的な論文、新規性、独自性、国際性、手外科領域の臨床への貢献度を評価項目として厳正な審査を行い、英語論文賞に下記2名を選出しました。(順不同)

- Mature but not developing Schwann cells promote axon regeneration after peripheral nerve injury. npj Regenerative Medicine, 2022 Jan 28;7 (1) :12.

北海道大学大学院医学研究院 整形外科教室 遠藤 健 先生

- Ultrasound With Artificial Intelligence Models Predicted Palmer 1B Triangular Fibrocartilage Complex Injuries. Arthroscopy: The Journal of Arthroscopic & Related Surgery, 2022 Aug;38 (8) :2417-2424.

神戸大学 整形外科 篠原一生 先生

<第1回天児民和賞選定について>

今年度より創設されました天児民和賞の募集には12名の応募がありました。

第2回理事会にて承認された通り、日本手外科学会理事長および副理事長が応募者の手外科関連業績を総合的に評価し、下記1名を選出しました。

名古屋大学 人間拡張・手の外科学 山本美知郎 先生

<学会と学術集会の連携強化について>

今年度から各委員会に学術集会で企画するセッション案の募集を開始しました。11件の応募があり、そのうち5つが24年度の学術集会でのセッションとして採用されました。

今年度も日本手外科学会の学術・研究部門を支えるべく、担当理事のもと尽力してまいります。引き続き、ご指導・ご鞭撻をよろしくお願い致します。

専門医制度委員会

担当理事 西 田 圭一郎
委員長 田 中 克 己

1) 委員会メンバー

専門医制度委員会は西田圭一郎(担当理事)、田中克己(委員長)、池上博泰委員、射場浩介委員、垣淵正男委員、栗本 秀委員、佐藤和毅委員、島田賢一委員、田尻康人委員、辻井雅也委員、松村 一委員、森田晃造委員、山本美知郎委員の13名で活動しています。

2) 当委員会の業務

当委員会は日本専門医機構によるサブスペシャリティ領域の手外科専門医として認定を受けることが喫緊の課題となります。もちろん良質な手外科の育成が本来の目的ですが、以前より課題の一つとしてあげられているように社会からの認知度を考えますと、日本専門医機構からのお墨付きをいただくことはたいへん重要なことであると考えております。手外科学会の中では、手外科専門医検討委員会、カリキュラム委員会、専門医資格認定・施設認定委員会、専門医試験委員会をはじめ、情報システム委員会、キャリアアップ委員会など、関係する委員会すべてと連携を図り、制度設計に取り組んでいます。

そのために基本領域学会である日本整形外科学会と日本形成外科学会の両学会との綿密な調整を行っており、日本整形外科学会に設置されたサブスペシャリティ領域連絡協議会を通して機構との折衝を図っています。

また、新規指導医申請に関する業務を遂行しております。

3) 活動報告と今後の予定

2023年には、日手会ニュースならびに社員総会でもご報告いたしましたが、2月16日にレビューシートを提出した後に4月21日の専門医機構理事会での承認を受けて、整備基準の作成の後、認定に向かう予定でしたが、残念ながら具体的な結果等につきましては、いまだ明確な回答が得られていない状況です。

8月29日には、日本専門医機構主導の形で、第1回サブスペシャリティ領域懇談会が開催され、サブスペシャリティ領域専門研修細則の改定とともに今後の予定が報告されました。日手会としては「脊椎・脊髄外科」と同様に臓器別の領域分類(カテゴリー1:「機構が指定する領域」のType I)として対応可能であるとの考えで一致しており、現時点での「整備基準」と「手外科カリキュラム」を領域連絡協議会を通じて12月20日の締め切りまでに日本専門医機構に提出いたしました。今後の流れとしては2024年1月までに審査が行われ、年度内に結果が判明する予定です。今回、機構からの直接の要請はなかったのですが、認定された場合には、制度として「専攻医研修マニュアル」ならびに「指導医マニュアル」も必要となるため、すでに案として策定しています。

2024年に入り、機構からサブスペシャリティ領域専門医制度細則第二版についての通知と1月29日に説明・意見交換会の案内が届きました。まだまだ、いくつかの課題がありますが、委員一同、引き続き取り組んでまいります。会員の皆様のご理解とご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

専門医資格認定・施設認定委員会

担当理事 古川 洋志
委員長 長谷川 健二郎

今年度、専門医資格認定・施設認定委員会は、理事：古川洋志先生、アドバイザー：中尾悦宏先生、森田哲正先生、委員：荒田順先生、岩川紘子先生、金谷貴子先生、鎌田雄策先生、小橋裕明先生、齊藤晋先生、鳥居暁子先生、鳥山和宏先生、堀内孝一先生、本宮真先生、委員長：長谷川健二郎で開始しました。

2023年6月20日に第1回Web委員会を行い、指導医申請46名と認定研修施設新規申請14施設について審査を行い問題ないことが確認されました。また、専門医申請資格の改正予定に対し、本委員会よりFAQを作成することになり、委員長のFAQ案について本委員会全員に意見をいただき、まとめた内容を7月の理事会に提出して定款委員会で確認の上FAQの改訂を行いました。

2023年11月27日に第2回Web委員会議を開催し、認定研修施設【新規】審査を行い、基幹16施設、関連5施設において問題ない事が確認されました。認定研修施設【更新】審査も行われ、71施設、関連12施設において問題ない事が確認されました。また、新専門医認定申請書審査が行われ、50名の書類審査を行い、申請者50名中、書類審査で23名が合格、17名が個別指導による再提出、5名が次回審査に持ち越し、2名が提出論文の内容再確認、3名が論文不備(1名が不合格、2名が再提出依頼)となりました。今回「基礎の論文内容で手外科に関する論文」について議論されました。

この件を受けて2023年12月4日に、専門医制度委員会担当理事 西田圭一郎 先生を御招きし、担当理事 古川洋志、アドバイザー 中尾悦宏、委員長 長谷川健二郎とで臨時 Web 会議を行った。その結果、次の結論に至った。1) 手外科専門医には、高い臨床的専門性が要求される。「手外科に関する論文であること」に、当委員会は毅然とした審査を行い、提出論文が「手外科に関する論文であること」を、当委員会全員一致で確認する。2) 基礎研究の論文でも、遺伝子ノックアウトマウスの解析で手の先天異常に関連する発生の研究、末梢神経の再生に関する論文、腱縫合後の強度に関する動物実験は「手外科に関する論文であること」と判断できる場合が多い。手以外の身体部位でも皮弁の血行に関する解剖学的検討であればマイクロサージャリーと関連づけることも可能である。一方、「広く運動器のサイエンスを探求する研究であり、運動器の他の領域の論文とみなすことも可能であるような論文」は、委員会で内容を吟味の上、手外科専門医申請論文としては不適切と判断する。他の専門学会誌に掲載可能な論文や方向性が曖昧な論文は、委員会から申請者に差し替えを要求するべきと考える。3) 定款・専門医制度細則の別紙2に「本学会の認定手外科専門医制度手外科専門医研究カリキュラム」に稀なためよく理解すべき項目:CにI.1) 基礎2 解剖、生理、病態、再生(筋、腱、皮膚、爪)があるが、「手外科診療に関連する解剖、生理、病態、再生は手外科専門医として十分に理解するべき」というカリキュラムであると解釈する。(再生に関する基礎研究論文が業績とみとめられる理由にはならない。)

2023年12月11日に第3回Web委員会議が開催され、上記を委員全体で確認し、最終結果として、今回の新専門医認定申請書審査では50名中6名が不合格となった。専門医更新申請書審査申請者は202名であった。11名が書類修正依頼となり、6名が単位不足であった。単位不足の6名に対しては、2024年1月20日から始まる日本手外科学会教育研修講演(web開催)に参加していただき、単位不足

を補っていただくことになった。専門医更新においては、専門医更新単位不足の先生方が複数名あり、今後事前に準備をしていただけるように注意喚起に努めたいと考えております。専門医資格認定・施設認定委員会は、アドバイザーの先生方の御指導と委員の先生方の時間をかけた詳細なチェックのもとに成り立っており、大変感謝しております。引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

専門医試験委員会

担当理事 **松田 健**
委員長 **内藤 聖人**

1：委員会メンバー

担当理事が松田健、委員長が内藤聖人、アドバイザーが南野光彦、西田淳、山崎宏、委員が尼子雅敏、新井健、奥井 伸幸、幸田 久男、佐々木 薫、助川 浩士、大安 剛裕、竹内 直英、田中 啓之、根本 充、橋本 一郎、長谷川 和重、依田 拓也の18名で活動しています。

業務は専門医試験問題の作成、専門医試験の実施、日本手外科学会誌の総説設問の査読です。

2：専門医試験問題の作成

新作問題の作成を担当理事・委員・アドバイザーが分野別に担当しました。試験問題のブラッシュアップはWeb会議ツール「Webex Teams」を用いて行いました。

3：第14回専門医試験について

2023年4月22日、ステーションコンファレンス万世橋で第14回専門医試験を行いました。

4：第15回専門医試験について

第15回専門医試験は、2024年4月25-26日に開催される第67回学術集会翌日、4月27日に、奈良で現地開催（奈良ロイヤルホテル）を予定しています。口頭試験は実施致しません。2024年2月23日に委員会を開催し、試験問題の最終ブラッシュアップを行い、最終的に試験問題数は50問（うち整形・形成分野別問題4問）を準備しました。試験後、委員会審議および理事会承認を経て試験結果をお知らせできる見込みです。

5：日本手外科学会誌の総説設問の査読

日手会雑誌に総説を執筆する先生は、専門医試験の様式に則った「新作問題と答え」を2問作成いただいております（総説設問）。この総説設問をWebex Teams上で担当理事・委員・アドバイザーが順次締切に併せてブラッシュアップしました。これまで編集委員会からの12問の査読が終了し、編集委員会に送付しました。出版後に教育研修・オンラインジャーナル委員会に送付、順次Q&Aコーナーに掲載されます。

次年度も適切な専門医試験が実施されるよう引き続き準備を進めてまいりますので、会員の皆さまのご理解とご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

カリキュラム委員会

担当理事 内山茂晴
委員長 日高典昭

2023年度のカリキュラム委員会は、内山茂晴担当理事(岡谷市民整形)のもと、委員は梶原了治(松山赤十字整形)、黒川正人(熊本赤十字形成)、高木誠司(福岡大形成)、田鹿毅(群馬大整形)、谷脇祥通(国吉整形)、山内大輔(福井済生会整形)の各先生から構成されており、委員長は日高典昭(大阪市立総合医療センター整形)が2022年4月から務めています。

本委員会の主な業務は、専門医制度細則に則って教育研修講演の認定を行うことです。1か月毎に申請書類が委員に送られ、メール審議を行います。2023年4月から2024年1月までに申請された講演数は合計183講演、初回審査で承認したものが155講演、タイトルの変更や推薦状・要旨など追加書類の提出後に承認したものが9講演、非承認としたものが7講演、取り下げとなったものが1講演でした。

承認の適否は、専門医制度細則と日手会教育研修講演に関するFAQにしたがって判断します。申請された講演は可能な限り承認する方向で考えていますが、これらを読まずに申請したと考えられるケースが時にみられます。申請書の冒頭にチェックボックスを作成していますので、迅速に手続きを進めるためにも細則とFAQをよく読んでいただき、「手外科との明らかな関連性」が分かる形での申請をよろしくお願いいたします。

また、以前からマイクロサージャリーによる下肢の再建に関する講演を日手会教育研修講演として無条件に承認してよいか、という点が委員会ではしばしば検討事項となっていました。これについては理事会でも話題に上ったため、臨時委員会を開催して議論しました(2023年7月20日、ウェブ会議にて)。その結果、無条件に承認することはせず、FAQに以下の文言を追加し、要旨の提出を条件に承認することとしました。

① Q. 講演の内容が下肢に対するマイクロサージャリーを用いた再建に関するものであっても認められますか？

A. 原則として認めますが、手外科医にとって教育的価値のある内容であることを示す100～200字程度の要旨を必ず提出して下さい。

カリキュラム委員会の活動へのご理解とご協力を今後ともよろしくお願い申し上げます。

情報システム委員会

担当理事 村 瀬 剛
委員長 松 浦 佑 介

【委員会構成】

情報システム委員会は、担当理事、村瀬 剛先生のもと委員長を私、松浦佑介が務め、委員として岡久仁洋先生、栗本秀先生、鈴木拓先生、松井雄一郎先生、宮脇剛司先生、吉井雄一先生、アドバイザーとして西浦康正先生にご助言をいただき、計9名のメンバーで活動を行っています。

【委員会活動】

本委員会では、日手会会員、専門医・指導医、研修施設など、様々なデータの一元的管理をシステム化する業務を行っています。様々な申請、手続きをシステム化することにより、作業量の削減を図り、日手会の事務局や会員の皆様に還元することを目的としております。現在システム改修の第2フェーズが大詰めを迎えております。2023年7月1日より日手会入会申請手続きがオンライン化し、運用が開始されました。また、研修認定施設管理システムならびにオンライン決済システムが今年度中に運用を開始し、今後、研修認定施設申請・更新システムの運用を進めてまいります。研修認定施設管理のシステム化にあたり、電子メールや診療施設等の会員情報の整理が必要であり、会員への情報周知と確認作業の徹底を実施いたしております。さらに、専門医資格認定・施設認定委員会や倫理利益相反委員会などの関連委員会と合同会議を行い、よりユーザー目線に立ったシステム構築を進めていくとともに、それに合わせた細則の変更等、各所と連携を取って進めていく所存でございます。

さらに専門医機構の審査によって保留となっていた専門医申請・更新・承認業務のシステム化についても、前向きに作業を進めていく方針でございます。皆様が使いやすいシステム構築を目指し、順次進めてまいりますので、ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます

会議等を以下の通り行いました

- 2023年1月20日 第1回倫理利益相反委員会/情報システム委員会合同会議
：オンライン入会申請システムの内容の確認・方針決定
- 2023年1月26日 KCSとの打ち合わせ
：会員管理システム、認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認
- 2023年2月20日 KCSとの打ち合わせ
：会員管理システム、認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認
- 2023年3月10日 情報システム委員会
：認定施設管理システム、オンライン入会申込システム、オンライン決済システムについて
- 2023年5月22日 KCSとの打ち合わせ
：認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認
- 2023年6月23日 KCSとの打ち合わせ

- ：認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認
- 2023年8月4日 KCSとの打ち合わせ
 - ：認定施設管理システム、オンライン入会申込システム、オンライン決済システムの仕様確認
- 2023年8月30日 KCSとの打ち合わせ
 - ：認定施設管理システム、オンライン決済システムの仕様確認
- 2023年10月24日 KCSとの打ち合わせ
 - ：認定施設管理システム、オンライン決済システムの仕様確認
- 2023年11月16日 KCSとの打ち合わせ
 - ：認定施設管理システム、オンライン決済システムの仕様確認

キャリアアップ委員会

担当理事 **副 島 修**
委員長 **日比野 直 仁**

キャリアアップ委員会は、日手会における男女共同参画と専門医数の地域格差是正を目的とした委員会です。担当理事・委員長以下12名の委員、アドバイザーで活動しました。

委員（敬称略）有光小百合、上里涼子、長田龍介、洪淑貴、仲宗根素子、林原雅子、原友紀、藤井裕子、古庄寛子、牧野仁美、山本宗一郎、アドバイザー 新関祐美

対面・Webの委員会を計3回開催し、その間はメール会議等で以下の活動を行いました。

【従来の活動の継続】日手会ニュースJoyの声の運用、学術集会託児所開設依頼、専門研修施設募集と現況調査、日手会HP内の委員会ページの更新、相談窓口の相談に関して議論を行いました。

【当委員会セッションの企画・開催】第67回学術集会では世代別のキャリアアップと題してシンポジウムを仲宗根委員・古庄委員が企画、立場世代の異なる女性医師に、どのようにキャリアアップに関して描いておられるか、ご口演頂き、総合討論を予定しています。

【相談窓口の相談に対する返答】日手会HP内のキャリアアップに関する相談窓口への相談（専門医取得における業績形成に出生、育児期間の猶予を認めてほしいという要望）に関し、委員会内で議論し、理事会に要望を提出致しました。理事会で方向性について承認され、今後は定款等検討委員会で細則の追加変更作業が始まることになりました。

【トラベリングフェロー（TF）マイノリティー枠創設に向けての議論】女性の活躍推進活動として、女性TFの促進に向けて、応募年齢の引き上げ（アジア枠は50歳まで引き上げられました）、またポジティブアクションを提言しましたが、男性差別という意見もあり、進展がみられていませんでした。洪委員を中心にTF応募における過去の実績から業績形成に不利な女性、専門医の少ない県から選出するポジティブアクションとしてマイノリティー枠創設に向けた議論を進め、理事会へ要望書を提出しましたが、国際委員の担当理事から「アジアフェローでの可能性について打診します」との返答を得ましたが、マイノリティー枠という名称、制度設計に関して今後委員会内で議論を深める必要性を認識致しました。

【日本医師会 女性医師支援センターの補助金事業による座談会の開催】林原委員、有光委員が企画・

準備し、「パートナーとつくるサステナブルな働き方とは？一育児分業、男性育休」と題してWeb座談会を2023年12月23日に開催しました。育児に積極的なイクメンシンポジストによる第66回日手会での講演内容をビデオ再生して追加発表を行って頂きました。後半事前アンケート結果を紹介し、1.育休取得を決断させたもの、障壁。2.管理者側は育休を取得する人、しない人のバランスをどう取るか。育休取得者が同僚に対してできる配慮とは。3.家事、育児分業のコツについて討論を行いました。医学生・研修医を含む171名の参加者(男性が171名中約70%、世代:20代3名、30代36名、40代58名、50代44名、60代21名、70代以降6名)を得ました。目的として掲げた育休に関する正しい基礎知識を皆様と共有をすることができました。(詳細は本座談会の動画を日手会HPにアップ中)参加者へのアンケートで、内容の満足度が5段階で3以上が91.6%と好評を得ました。来年以降も本事業に応募しキャリアアップに対する諸問題への働きかけを継続していきます。

特別委員会

定款等検討委員会

担当理事 内山茂晴

委員長 上原浩介

【委員会メンバー】

当委員会は、担当理事:内山茂晴、委員長:上原浩介、岩川紘子、岩月克之、大谷和裕、川勝基久、櫻庭実、前田和洋、松本泰一、村田景一、横田淳司の各委員の計11名で活動を行いました。昨年に引き続き、コロナ禍の影響から対面審議は行わず、全ての活動をメール審議で行いました。今年度も、日本手外科学会の将来を見据えた重要な議題が複数ありました。

【委員会活動】

1. 理事枠増設

現在の理事数は定款により8名以上12名以内となっています。現在委員会を3~4担当している理事が数人おり過重な負担がかかっており、担当委員会数を1~2程度とし理事の負担の軽減をはかりたい点、複雑化する案件に理事会が柔軟に対応するため多様な人材の中から、例えば性別における多様性を重視するなどして理事を登用しやすくする必要が考えられる点から、理事2名の増員が提案され、理事会での承認を経て、「定款 第5章役員(役員) 第25条」の理事数の変更を行いました。第66回日本手外科学会学術総会期間中に行われた代議員総会で、理事数増加の提案に関して、内山理事から代議員の先生方に説明させていただき、討議の上、承認されました。

2. 所属施設管理への厚労省施設コードの使用

現在、情報システム委員会により施設認定管理システムの構築が進められており、新しいシステムでは所属施設管理に厚労省施設コードの使用が検討されています。そのためには、現行の診療科単位での申請区分を廃止し、1施設1登録とする施設区分を一元化する必要があり、「細則第6号第21

条(研修施設の申請)、「細則第6号第20条(研修施設及び申請資格)」情報システム委員会の案を検討・修正しました。また、様式4-1および4-4(基幹および関連研修施設認定申請書)の「診療科責任者」署名欄を廃止することとなりました。

3. 専門医制度細則第6号、指導医制度細則第8号の用語の統一

専門医制度細則第6号、指導医制度細則第8号の指導医・専門医の用語の定義の仕方が統一されていない点、用語の定義後も「専門医」でなく「日手会専門医」などの用語がところどころで使われている点などがあり、細則を確認し、適宜修正しました。それら修正案は3月下旬理事会で承認されました。

4. 専門医制度細則、FAQの追加

専門医資格認定・施設認定委員会より、専門医制度細則の業績に関する内容の変更要請、FAQの新たな追加要請があり、理事会での承認後、専門医制度細則、FAQの文言の確認・修正を行いました。

5. 国際学会旅費規程

国際委員会委員の先生が、日本手外科学会の代表として交渉ごとなどで国際学会に参加する場合の出張費(旅費、宿泊費、参加費)の補助や支払い手続きについて、定款等委員会および理事会で検討し、その内容を明文化した方が良いのではとの提案があり、「一般社団法人日本手外科学会理事会・委員会開催費及び公務出張旅費等に関する規程」の改定を行いました。

以上、今年度の活動報告とさせていただきます。お忙しい中、貴重な意見を出し、活発に議論いただきました委員会委員の先生方、審議の過程でご協力をいただきましたシステム委員会・専門医委員会委員の各先生方、日手会理事の先生方に、この場をお借りして深謝いたします。

手外科専門医検討委員会

担当理事 副 島 修
委員長 三 上 容 司

2023年度の手外科専門医検討委員会は、日本専門医機構の新専門医制度におけるサブスペシャリティ(以下サブスペ)領域承認を目指して、副島 修担当理事のもと助川浩士、田中克己、吉井雄一、吉田史郎、三上容司の5名の委員で構成されています。三上委員長が日整会に設置されたサブスペ連絡協議会に日手会代表委員として参加し、基本領域学会との連携・調整を図るとともに、連絡協議会を通じて専門医機構とのやり取りを行っています。

2022年1月に日手会として手外科領域のサブスペ領域認定を目指してレビューシート(申請書)を提出しましたが、日本専門医機構のサブスペ領域検討委員会での審査後、理事会での審議を経て2022年5月に認定しないとの通知が届きました。その後、日手会としては再度、機構認定サブスペ領域を目指すことになり、専門医制度委員会の西田理事を中心に作成いただいたレビューシートを2023年1月にサブスペ領域連絡協議会を通して機構に提出しました。この時点で、専門医機構での

審査結果が2023年5月に出る予定とのことでした。そこで、審査開始前に手外科の現状を知っていただくために、2023年2月～3月にかけて、日手会の理事、代議員の方々に手分けして機構サブスペ領域検討委員会のメンバーに、個別に手外科の現状、概略をご説明いただきました。ご協力いただいた先生方にはこの場を借りて御礼申し上げます。

しかし、機構における審査はその後行われることなく、延び延びとなっています。2023年8月には、サブスペ専門研修細則の大幅な改定案が提示されました。この改定案の骨子は、サブスペ領域を3つのカテゴリーに分類するというものです。カテゴリー1は、機構が指定し機構が認定する領域、カテゴリー2は、基本領域のサブスペ領域連絡協議会が指定し機構が認定する領域、カテゴリー3は、基本領域サブスペ領域連絡協議会が認定し、機構が承認する領域です。もう一つは、基本領域の専攻医数によりカテゴリー3のサブスペ領域数の上限を設定するというものです。

この機構から新たに提示された細則(案)に従い、手外科学会では西田理事を中心に手外科の整備基準とカリキュラムを修正していただき、これら修正版をカテゴリー1として、2023年12月にサブスペ領域連絡協議会を通して機構に提出しました。

2024年1月29日現在、機構において手外科領域の審査は行われておらず、2月以降に審査予定とのこと。1月29日に行われた機構による説明・意見交換会で示されたサブスペ領域専門研修細則第二版には、グループA(サブスペ領域の専門医の70%以上が特定の基本領域専門医で構成される)においては、主たる基本領域以外の基本領域専門医が専攻研修を行う場合には、連動研修方式は採用しないとされました。手外科はグループAですので、このルールに従うと、整形外科専門医は連動研修が可能ですが、形成外科専門医は連動研修不可ということになります。研修期間にかかわる大きな問題ですので、今後この点が認定の障壁になるのではないかと危惧しています。機構としては、手外科領域の審査を2024年6月頃までには進めるとしていますが、今後の動向を注視する必要があります。

当委員会は、日手会(手外科領域)がサブスペ領域として専門医機構に認定されるまでという期限付きのアドホック委員会ですが、それまでは他の専門医関連委員会と連携しつつ、他の委員会の枠におさまらない役割を担っていく予定です。どうぞ今後とも宜しくお願い致します。

将来展望戦略委員会

担当理事 篠原孝明
委員長 山本真一

2023年度将来展望戦略委員会のメンバーは、担当理事の篠原孝明先生、アドバイザーに平田仁先生、委員に高木誠司先生、西浦康正先生、日高典昭先生、村瀬剛先生、委員長の山本真一と変更はなく、web会議を中心に活動してきました。

本委員会は、アンケート調査対応委員会として2020年度に発足しましたが、名称変更して、手外科認知度向上や企業との連携探求の企画を理事会へ提案し実践することを活動方針としています。

まず、2021年11月のオンラインフォーラムを発展させて、2024年度学術集会@奈良で、更年期女

性疾患にターゲットを絞った合同公開シンポジウムを企画することとし、一般市民向けのわかりやすいキャッチフレーズも作成することにしました。キャッチフレーズは平瀬雄一先生が考案された「Menopausal Hand」を略した「メノポハンド」に決定し、学術集會会期内に医師・市民・企業代表で合同シンポジウムを開催して、一般市民へは内容を編集し日手会ホームページに公開する予定としました。いくつかの企業との対面会合・web会議を重ね、収支を学術集會とは別として趣意書を作成し、修正を重ねた後に広募しました。その結果、今回は大塚製薬に共催していただき、ニプロ・Arthrex社が広告後援として、変形性関節症をテーマに開催することとなりました。また、市民代表として女性の健康とメノポーズ協会・三羽理事長、企業代表として大塚製薬ニュートラシューティカルズ事業部・内山研究員にも登壇していただきます。医師側は、平瀬雄一先生・里中東彦先生・池口良輔先生・下江隆二先生に演者をお願いしており、世界の動向や保存・薬物療法を中心に口演いただく予定です。是非、会員皆様の本シンポジウムへの参加をお待ちしております。

以上のように、本委員会は2~3ヵ月毎にweb会議を行っており、2025年度学術集會でも合同公開シンポジウムを企画・発信することを目指すこととしております。手外科の認知度向上を目指す本委員会への皆様の御理解と御協力のほど、何卒よろしくごお願い申し上げます。

日本手外科学会関連のお知らせ

◆ 2024 年度教育研修会 ◆

会 期：2024年1月20日(土)～3月20日(水)

会 場：WEB開催

U R L：<https://jssh-2023.c-cloud.co.jp/>

主 管：日本手外科学会 教育研修オンラインマガジン運用委員会

.....

◆ 第 67 回日本手外科学会学術集会 ◆

会 期：2024年4月25日(木)～26日(金)

会 場：奈良県コンベンションセンター / JWマリオット・ホテル奈良

会 長：面川 庄平(奈良県立医科大学 手の外科学講座 教授)

詳 細：<https://naraseikei.com/67jssh/>

関連学会・研修会のお知らせ

◆第 67 回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2024年4月10日(水)～12日(金)
会 場：神戸国際会議場・神戸ポートピアホテル
会 長：寺師 浩人(神戸大学大学院医学研究科 形成外科学 教授)
詳 細：<https://convention.jtbcom.co.jp/jsprs67/>

.....

◆第 36 回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：2024年4月27日(土)～28日(日)
会 場：奈良県コンベンションセンター
会 長：会長 蓬莱谷 耕士(関西医科大学 リハビリテーション学部)
詳 細：<https://plaza.umin.ac.jp/jhts36hand/index.html>

.....

◆第 97 回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2024年5月23日(木)～26日(日)
会 場：福岡国際会議場、マリンメッセ福岡A館・B館
会 長：松本 守雄(慶應義塾大学医学部 整形外科学教室 教授)
詳 細：<https://www.joa2024.jp/index.html>

.....

◆第 16 回日本手関節外科ワークショップ◆

会 期：2024年10月12日(土)
会 場：川崎市コンベンションホール
会 長：西脇 正夫(川崎市立川崎病院整形外科 手肘外科センター)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jsw2024/>

.....

◆第 35 回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2024年9月6日(金)～7日(土)
会 場：鹿児島県医師会館
会 長：高嶋 博(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 脳神経内科・老年病学 教授)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jpns2024/index.html>

.....

◆第 37 回日本臨床整形外科学会学術集会 火の国学会・熊本◆

会 期：2024年7月14日(日)～15日(月・祝)
会 場：熊本城ホール
会 長：東 一成(医療法人社団東栄会 東整形外科 院長)
詳 細：<https://www.c-linkage.co.jp/jcoa37/>

.....

◆第 33 回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2024年10月17日(木)～19日(土)
会 場：ヒルトン東京お台場
会 長：吉村 浩太郎(自治医科大学形成外科 教授)
詳 細：<https://www.ipsrc.org/jp/>

.....

◆第 39 回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2024年10月17日(木)～18日(金)
会 場：京王プラザホテル(新宿)
会 長：仁木 久照(聖マリアンナ医科大学整形外科学講座 主任教授)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/joakiso2024/>

.....

◆第 51 回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：2024年11月28日(木)～29日(金)
会 場：奈良春日野国際フォーラム 麓～I・RA・KA～
会 長：村田 景一(市立奈良病院 四肢外傷センター センター長)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jsrm51nara/index.html>

.....

◆第 35 回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2024年12月13日(金)～14日(土)
会 場：福岡国際会議場
会 長：高村 和幸(福岡市立こども病院 整形・脊椎外科 整形外科科長)
詳 細：<https://www.jpoa2024.org/index.html>

編集後記

2024年は1月1日に発生した能登半島地震のニュースで始まりました。冒頭にこの地震によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。また、被災地の復興支援のために尽力されている方々に深く敬意を表します。

今回お届けする日手会ニュース59号では直前に発生した東日本大震災のため初めてのWEB開催となった第54回日手会会長を務められた藤 哲先生よりご寄稿いただいております。また、5名の先生からTravellig Fellowのご報告があり、日手会の先生方の国際的な活躍が広がっていることを頼もしく思うとともに、ようやく学会活動がコロナの影響を脱したという実感がわいてきました。日高典昭先生にご執筆いただいている「手外科医のリスクマネジメント」では、局所麻酔の合併症について詳述していただいております。毎日のように使用する薬剤であり、合併症対策を改めて心したいと思えます。また「Joyの声」は古庄寛子先生、「リレーエッセイ」は吉井雄一先生にご執筆いただいております。お忙しい中ご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。

4月25日からは面川庄平会長よりご挨拶いただいた第67回学術集会在奈良で開催されます。多くの先生方のご参加と活発な議論がおこなわれることを祈念いたします。

(文責:愛野記念病院 宮崎洋一)

広報渉外委員会

(担当理事:古川洋志, 委員長:佐藤光太郎, アドバイザー:岸 陽子
委員:金谷耕平, 堂後隆彦, 中川夏子, 原 友紀, 宮崎洋一)